



2017 スリランカ

スタディーツアー

(8月31日～9月8日)





目次

1. 行程表
2. 参加者一覧
3. 参加者報告書





行程表

2017(H29)年度 JIPPO スリランカ・スタディツアー 日程

	月日(曜)	地名	時刻	内容
1	8月31日 (木)	関西空港 関西空港発(TG-623) バンコク着 バンコク発(TG-307) コロンボ着	9:30 11:45 15:15 22:15 23:57 1:00 1:25	団体カウンター集合、チェックイン バンコクへ(所要時間 5 時間半) 乗換 コロンボへ(所要時間 2 時間半) 日本時間 03:27 着 着後、入国審査、両替 現地ガイドと合流し、ホテルへ ラマダ カトナヤケ着 (コロンボ泊)
2	9月1日 (金)	ネゴンボ (Negombo) コロンボ (Colombo) モラトワ (Moratuwa)	6:30 9:00 9:30 10:00 11:00 12:00 12:50 13:00 15:30	朝食 ホテル発 コロンボ市内見学 ネゴンボ フィッシュ マーケット 聖マリア教会 ガンガラマ仏教寺院 オディール モール 独立記念ホール 中華料理 Xilaton で昼食 モラトワにてホームステイ 学生以外はホテルチェックイン (モラトワ泊)
3	9月2日 (土)	モラトワ	終日	ホームステイプログラム 学生以外はホームステイ先訪問 (モラトワ泊)

4	9月3日 (日)	モラトワ	10:00	モラトワ集合 ホストファミリーへ挨拶
		ラトゥナプラ (Ratnapura)	10:20	モラトワ出発
			13:00	ラトゥナプラ 宝石採掘現場見学
			14:30	ベリフルオヤ レストハウスで昼食 車内でホームステイの振り返り
		ハプタレー (Haputale)	16:50	オリンパスプラザ着
			19:30	夕食 (ハプタレー泊)
5	9月4日 (月)	ハプタレー	7:30	朝食
			8:45	ホテルから徒歩で幼稚園へ
			9:00	ハプタレー市立幼稚園 交流 ハルドウムツラへ移動
		ハルドウムツラ (Haldummulla)	11:00	ニードウッド茶園 見学
			11:30	茶摘み体験
			12:00	プランテーション労働者住居訪問
			13:00	バンガローで昼食
			13:40	ニードウッド製茶工場見学
			16:30	ホテル戻り
		ハプタレー	19:30	夕食
		21:30	振り返りの会 (ハプタレー泊)	
6	9月5日 (火)	ハプタレー	7:30	朝食
	ポヤデー (満月)		8:30	ホテル発
		ハルドウムツラ	9:10	スリ・パスパラマヤ寺院 (カルパナ S.テロ住職)表敬訪問
			9:30	手づくり紅茶ワークショップ
			13:00	昼食
			17:30	ワークショップ終了、買い物
		ハプタレー	19:00	ホテル戻り
			19:30	夕食
		21:30	振り返りの会	



参加者一覧

JIPPO

高木美智代

京都女子大学

松田哲

井上弥優

佐薙絵実

龍谷大学

辻奈都乃

沓間美奈

白井夢乃

横山七海



参加者報告書

井上弥優

スリランカとはどのような国でどのような文化なのか、このツアーに参加するまで全く知らなかった。正直に言うと貧しく少し危ない国だと思っていた。あまり観光地として知られていないスリランカをこの目で見て、スリランカの良さも問題も伝えたいと思い、わたしはこのツアーに参加した。

一日目のホームステイでは、スリランカの文化に触れることができた。手で食事することに驚きを隠せなかったが、異文化とはこういうものだ、違う文化を味わうことができ、みんなと一緒に手で食べられたことが嬉しかった。ホストマザーが「無理して合わせる必要ない」と言い、スプーンとフォークを用意してくれた時、お互いの文化を理解し合うことの大切さを学んだ。日本でシャワーを浴びる時間やご飯を食べる時間など細かく聞いてくれて、日本の文化を理解し、それに合わせてくれる家族の温かさを感じた。文化の壁は言葉の壁よりも簡単である。言葉は時間がかかるが、お互いの文化を理解することは一日もかからない。二日目は近所の子どもたちと一緒に、子どもと朝から夕方まで遊んだ。ヤシの木の葉っぱで楽しそうに遊ぶ子どもたち。日本の小学生たちは葉っぱ一つでこんなにも楽しく遊ぶだろうか。テレビゲームや、ゲームセンターに行く日本の子どもたちとは違い、お金をかけずに、家の外で楽しそうに遊ぶ子どもたちは、日本の子どもたちよりどこか幸せそうだった。夜はホストファミリーと団欒を楽しんだ。自分の家族とゆっくり団欒したことが最近あっただろうか、と気づかされた。昼は学校か遊び、夜はアルバイト、という毎日ばかりで家族との時間をとれていない。ホストファミリーは休日、家で家族とゆっくり過ごすことが多いらしく、家族全員すごく幸せそうだった。アメリカでホームステイをしたことがあるが、アメリカでは週末は遠いところにお出かけし、豪華な食事をした。どちらが幸せかと考えると、私的にはスリランカでの週末のほうが楽しさとぬくもりを感じた。お別れの時には子どもたちが最後の最後まで見送ってくれて寂しさがつのった。

ハプタレー市立幼稚園を訪問し、現地の園児は純粋で可愛かった。だが、どこか笑顔が少ないように感じた。みんなで輪になって手を繋ぐとき、なかなか手を繋ぎ合わない子どもたち。折り紙を教え、鶴を折ったとき、その鶴を取り合う子どもたち。子どもたちに協調性や思いやりが見られなかった。子どもたちは外でみんなと遊ぶことが少ないようで、勉強ばかりしているようだ。幼稚園にいる母親の目線が強く感じた。幼稚園のころは勉強を優先するのではなく、集団行動で遊ぶという教育が足りていないのではないかと市立幼稚園を訪問して考えさせられた。

紅茶畑で働く人を見に行くためハプタレーに行った。150年前にイギリスがスリランカに紅茶を伝え、そこから紅茶文化になったようだ。日本は紅茶の約6割がスリランカからのセイロンティーの輸入である。私は、その紅茶畑で働く労働者が話していた言葉が今でも忘れられない。「欲を出さなければ生活できるよ。でも正直言うと苦しい。」と言った。良くて日給720円で1か月12日ほどで働く人たち。この話をしてくれた人の身に着けている服がボロボロなことに、私は目をそらしたくなった。だが、そ

こから目をそらしては何も問題は見えてこない。その人たちは、必ず仕事があるわけではなく、雨などの天候によって働くことを左右され、また、1日20キロの茶葉をとらなければいけないというノルマつき労働である。20キロとはどれぐらい大変なことが、自分たちも茶摘み体験をして分かることができた。とれる葉は限られていて、その環境の中で一日20キロのノルマは厳しいと感じた。「欲を出さなければ生活できる」という言葉に、私は日本で何不自由なく生活し、かつ、それ以上に欲しいものや食べたいものなど欲ばかりが多く、贅沢しすぎていることに気づかされた。高い教育を受けることができない、10世帯で1つの家に暮らしている、だが家にトイレは3つしかない、そんな現地の人たちに私たちができることはなんだろうか。すぐ考えさせられた1日だった。

ハプタレーでの手づくり紅茶体験では、茶葉を潰す作業、茎と葉の部分を振り分ける作業など現地の人々の体力とテクニックにびっくりし、私が拍手をすると現地の人はずい笑顔を見せてくれた。おそらく、こうして現地の人々のすごさを見てもらう機会が少なく、こうして凄さを褒めてもらうことがないのではないかと思った。照れたように見せてくれた笑顔が今でも忘れられない。また、セイロンティーの良い葉の部分は輸出に使われるため、スリランカの人たちは葉のごみの部分を飲むそうだ。近くのマーケットに寄ったとき、「DUST」と書かれた葉の部分が売っていた。私は悔しかった。一生懸命に茶摘みをし、おいしい紅茶を作ってくれる現地の人に、おいしいセイロンティーを飲んで欲しい。今の私にはこの現状を変えることはできないが、願うことは、もっとセイロンティーの需要と供給が増えること、労働者の賃金が増えること、葉が育ちやすい環境になること、それらによって現地の人々もおいしい紅茶を飲むことを私は願う。私に見せてくれたとびきりの笑顔、私たちのために夜遅くまで紅茶を包んでくれた現地の人たち、しんどい顔ひとつせず最後まで笑顔であふれていた労働者たちに、この国の温かさを感じた。

9日間のスリランカスタディーツアーを通して、貧しいからといって幸せでないとは限らないと気づかされた。たとえ貧しくても、スリランカ人は笑顔が多く、温かい人が多い。そして、現地の人に合った文化と習慣があり、価値もある。他の国と比べて貧しい、と裕福さを比較してしまうかもしれないが、裕福なことが幸せではないのだと感じた。今回の現地コーディネーターをして下さったウプルさんが私に「あなたはいつもニコニコしているね。日本人はあまり笑わないから僕はあなたの笑顔が嬉しい。」と言った。日本人はどちらかと言うと裕福な暮らしをしている、が、わたしはスリランカの方が日本人より笑顔が多かったように思える。ただ、スリランカの厳しい現状がたくさんあった。バスに乗っていると、お花を買ってもらうために必死にバスを走って追いかける人。それで生計を立てて暮らしていると考えると、胸がしめつけられた。また、安い賃金で紅茶畑で働く人、その人たちは捨てる部分の紅茶を飲んでいること、そのような現状を目にし、今の自分に何ができるかと考えた。紅茶畑がもっと観光地になり、私たちが体験したような手作り紅茶を作れる観光を増やすことで、活性化するのではないだろうか。私にできることは、世界中の幅広い年代が利用するSNSなどにスリランカの良さを伝えることだ。正直、スリランカに行く前はどんな国か分かっていなかった。友達や親には、「貧しく危ない国」と言われ、行くことに反対されたこともあった。だが、私が個人的に写真を送り、SNSに写真や動画をアップすると、たくさんの人から「いい国だね」「行ってみたい」というコメントが多く、伝えることの必要さや大切さに気付かされた。私は9日間スリランカで体験したことを忘れず、これからも機会があれば伝え

ていきたい。そしてスリランカがもっと観光地として活性化することを願う。

佐藤絵実

1. はじめに

私がこのスタディーツアーに参加したのは、普通の海外旅行ではなかなか体験できないような経験をしてみたいと思ったことがきっかけだ。スリランカという国は名前を知っている程度で場所もよく分からなかったため、どのような国なのか行ってみたいと思った。実際にツアーに参加して、ホームステイや紅茶づくりなどの様々なプログラムを経験し、スリランカはとても素敵な国であると知ることが出来た。今回はこのツアーを通してどのような経験をし、何を学んだのかをまとめていきたい。

2. コロンボ見学

スリランカに着いた次の日は、コロンボ市内を見学した。コロンボはスリランカの最大都市で、経済の中心地である。実際に市内は車やバイクの交通量が非常に多く、ビルや様々な店が立ち並び、とても発展しているように感じた。そしてはじめに、現地の人々が利用する魚市場へ案内してもらった。魚市場では屋根もない場所で地面にシートを敷き、その上で魚を干していたため、犬やからすなどの鳥がたくさん群がっていたり、ハエが多いことに驚いた。魚を干している空間を通り抜けると、多くの商人が小さな机に魚を並べて販売していた。このような光景は日本の魚市場ともよく似ているように感じた。日本の魚市場よりは汚いと感じたがとても活気があり、アジアの雰囲気を感じたので楽しかった。

次に寺院へ訪れた。建物に入る前に裸足になることが求められた。スリランカでは神聖な建物に入るときには裸足になるという考えがあるようだった。また、ホームステイをした時には家の中だけでなく、庭やバルコニーへ出るときにも常に裸足で行動することが普通であり、日本との違いを感じた。寺院の中は大きな仏像がたくさん並んでいて、大音量で仏教の音楽が流れていた。仏像は日本のものは塗装がはがれた銅の色をしているが、スリランカの仏像は体が黄色く塗られており、色鮮やかだったため、日本の寺院とは違った迫力を感じた。また、寺のなかに大きな菩提樹があり、非常に大きく、いくつもの枝に分かれて絡まりあう姿は圧倒的な存在感があった。そして寺院には多くの人々から寄付された品物がたくさん展示されていた。これらのことから寺院の歴史の長さや宗教の力の大きさを知った。

次に独立記念館へ訪れた。独立記念館は縦長で、門や壁がないため、誰でも気軽に立ち寄れるような雰囲気があったが、正面には大統領の大きな像がたっており、迫力を感じた。中は広間のようになっており、スリランカの歴史が描かれた絵で囲まれていた。広間では昼寝をする大人や遊んでいる子供がいて、歴史に触れることができる素晴らしい空間だと思った。

次にオデールという市内のショッピングモールへ行った。オデールは最初に訪れた魚市場とは大きく異なり、とてもきれいで大きく、日本のデパートのようであった。オデールに行くことでスリランカの市場

を比較することができたのでよかった。

3. ホームステイ

ホームステイをした2日間はとても貴重な経験となった。ホームステイさせてもらった家族は5人家族で父、母、姉、弟、祖母という構成だった。また、子供たちのいところが常に家にいて、夜寝る時以外は自由に過ごしていたので親戚とのかかわりが日本より親密であると感じた。はじめは緊張していたため、相手の言っていることが理解できてもYESかNOでしか答えられず、質問も満足にすることも出来なかったが、お土産を渡したり自分の家族の写真などを見せ、徐々にコミュニケーションをとることが出来るようになった。そしてその日の夜は近所の友人宅で行われているホームパーティーに参加した。そこでは多くのスリランカ人や外国人がいて自由に会話していた。食事はバイキング形式でカレーをはじめとした様々な料理があった。私はホームパーティーに行った事がなかったため、初めはどこに居たらいいのか、誰と話したらいいのかなど分からない事ばかりで戸惑ったが、みんなに優しく話しかけてもらい、ホームパーティーを楽しむことが出来た。最後はみんなで歌を歌ってダンスを踊り、とても盛り上がった。

ホームステイ2日目はほとんど家で、子供たちと遊んでいた。16歳のお姉ちゃんのアルバムを見せてもらい、様々な伝統的な習慣を覚えてもらった。例えば4歳の誕生日に字を書くお祝いの儀式がある。また、小学校の先生の制服はサリーであることがわかった。スリランカの学校では伝統的なダンスや楽器を演奏しなければいけないらしく、練習が大変だということを知った。そして夕食後は近くの寺院へ行った。毎週土曜日は礼拝のような儀式を行っているようだった。私も線香をあげるなど様々な儀式を体験した。また、正装として白い服を着ていかなければいけないことに驚いた。

ホームステイ先の家族はみんなとてもやさしくて素敵な体験になった。ホームステイをする事で、英語を使って会話することへの勇気や自信が少し持てたように感じる。また、子供たちが英会話が非常に堪能であることに驚いた。彼等らの学校ではすべて英語で書かれた教科書を使用したり、すべて英語で行われている授業があるようだった。このことから私は、彼らのようにもっと英語を話せるようになりたいと思うと同時に、スリランカをはじめとした世界の国々ではどのような英語教育が行われているのか調べてみたいと考えた。

4. 紅茶づくり体験

紅茶の茶園を訪問し、2日間の紅茶づくり体験を通して様々なことを学んだ。まず、茶園での茶摘みは手作業で行われており、実際にやってみると、難しく、頭に袋をつけて作業することも茶葉が溜まって重くなると重労働になるのだろうと思った。茶園には家以外にもモスクがあるなど、茶園の中で生活がすべてまかなえてしまうため、外の社会と隔離される印象を持った。また生活している家はマネージャー、中間管理職者、労働者で大きく異なり、マネージャーは庭付きの大きな一軒家に住み、中間管理職者の家族はきれいな一軒家に住んでいるが、労働者たちは長屋のような集合住宅に暮らしていた。住む場所もはっきりと分けられていたため、格差を顕著に感じた。

茶園を見学した次の日に、紅茶を手作りで作った。前日に摘んだ茶葉をつぶして、ザルでふるいに

かけ、発酵させた後、乾燥するのが大まかな流れであるがどの工程も一つひとつが大変で根気のいるものであった。紅茶づくりと一緒にしてくれた現地の茶園労働者は初めてやるのにもかかわらず、大変な作業を淡々とこなしていたので、普段から重労働をこなし、慣れているのではないかと感じた。茶園労働者の日当は最高で 720 ルピーと決して高くはないが、最低限の生活ができるだけの給料は保障されている。しかし、1 か月に 12 日ほどしか働けず、茶園の外へ出稼ぎに行く人もいると知った。実際に茶摘みなどの労働を体験して、労働に見合った給料ではないと感じた。また、現地の人は「ダスト」と呼ばれるあまり出来の良くない紅茶しか飲んでいないということに驚いた。自分たちの作った紅茶の味を知ることで、その価値をもっとわかってほしいと思った。今回、労働者と一緒に紅茶を手作りしたことによって労働者たちと深くかかわることが出来た。みんなとてもやさしく、素直でまじめに働く素敵な人々だと感じた。茶園は経営者の権利などの争いにより、経営がうまくいかず、労働も満足にできない状況にあるため、労働者がしっかりと働き、満足な給料がもらえるように改善してほしいと思った。また、紅茶づくりの家庭を手作りで行うことによって、前日に見学した紅茶工場の機械の力の大きさを感ずることが出来た。

5. おわりに

ツアーに参加する前はスリランカは貧しい発展途上国で、治安も悪いというイメージを持っていたが、実際には人々はみんな優しく、まじめで、治安もよく、さらにコロンボなどの都市は非常に発展しているように感じた。しかし一方で道が整備されず、車が通ることが出来ない村があるなど、都市と村での格差が広がっているように感じた。また、様々な場面で宗教の違いやシンハラ人とタミル人の違いによる差別を実感した。紅茶という素晴らしい経済資源を持っているにもかかわらず、茶園の経営が悪くなっていることは問題である。茶園で働く労働者の多くがタミル人であり、彼らがスリランカの経済を支えているといっても過言ではない。だから差別をなくし、タミル人もシンハラ人も、都市も、村も格差のない世の中を作ることがこれからのスリランカ発展につながるのではないかと思う。

辻奈都乃

この海外体験学習プログラムでは、スリランカの様々な場所を訪れた。この報告書では、その中でも印象に残った、プランテーション労働者の暮らし、手作り紅茶、の二つに焦点を当てて書いていこうと思う。

まずは、プランテーション労働者さんについて。紅茶の農園ではインドタミルという民族の人が多く、イギリス植民地経営の名残で、プランテーション経営がとられているため、労働者さんの地位はとても低く、金銭的に貧しい暮らしを送っていることは聞いていた。だが、想像以上だった。長屋に 10 ほどの家族が住んでいてトイレは 3 つ。日給 720 円。同じスリランカでもホームステイさせていただいたような家々との違いは大きく、民族格差を強く感じさせられた。幼稚園でも、授業の際は民族によって言

語が違うため部屋が分けられるのだが、人数に関係なく、明るい大きな部屋にシンハラ人、暗い小さな部屋には少数民族のタミル人と分けられているという。また、労働者の方に話を伺うと、「出稼ぎに行っても稼ごうとは思わない、欲はキリがない、欲が無ければ生きている、けど充分なお金ではない、苦しい。」と言っていた。この言葉にはとても深みがあると思う。出稼ぎに行かずとも充分な暮らしが出来る社会になることを願うばかりである。その一つのサポートとして、jippo さんが行うフェアトレードや今回の手作り紅茶はとても良い取り組みだと思う。

次に、手作り紅茶について。このプログラムで手作り紅茶体験を行うと知った時、スリランカは紅茶で有名な国なので、現地の方に作り方を教えてもらえる取り組みだと思っていた。しかし、イギリスの植民地時代から工場で作っていたため、手作りで紅茶を作るという発想がなかったらしい。そのため、この手作り紅茶は労働者さんを自作農民化につなげ、新たな収入を得れる重要な取り組みだった。今回の取り組みは私たちの学びとして意味あるものだったと同時に、スリランカ経済を動かす取り組みであり、その場に居合わせたことがとても嬉しい。

この海外体験学習プログラムでは、直接スリランカを訪れて、現地の人々と交流することでスリランカの抱えている課題や魅力について、主に2つのことを感じた。一つ目は、民族差別の根深さである。日本ではなかなか気付けない民族差別の重さを目の当たりにし、もっと民族差別について理解を深めたいと思った。また、自分の目で正しい知識を得ることは非常に大切だと再確認し、今後の様々な場面で心掛けていきたい。2つ目は、スリランカの人々の心の豊かさである。プランテーション労働者の方々の生活は豊かとは言えないが、家を訪問させて頂いた時には、労働者の方々とその家族、子どもたちからはむしろ、私たちを歓迎してくれている様子で、優しさや気持ちのゆとりが見て取れた。また、手作り紅茶の時も大変な作業ながらも楽しみつつ、熱心に働いていた様子だった。日本は経済的に豊かだが、時間とお金を求め、過労死や老後の不安など深刻な現状にこと欠かない。スリランカを訪れたことで、経済的と心の豊かさは一致しないことを知った。生活や周りの人との何気ない生活など、本来の幸せを大切にしたいと思えた。

沓間美奈

スリランカで最も印象に残っているのは、出会う人みんなが笑顔だったことだ。幼稚園で交流した子供たち、ホストファミリーのみんな、紅茶農園での手作り体験を手伝ってくれた方々、みんなが笑顔だった。特に印象に残っているのは、紅茶農園の労働者の方である。目の前のスタッフの家との差に驚いたし、話をうかがった労働者の方が「今の賃金での生活は厳しいが、欲を持たなければ暮らしていける」とおっしゃっていて、自分がいかに日本で幸せな暮らしを送っているか実感した。そんな貧しい暮らしをしてもそこにいる子どもたちや労働者の方はみんな笑顔で、生き生きとしていた。

スリランカでの体験は全部が初めてのことだった。楽しみにしていたホームステイは、実際に会うまで、どんな家族かわからなかったが、子どもたちがたくさん質問をしてくれて溶け込むことができた。シンハ

ラ語をたくさん教えてくれて、日本語にも興味を示してくれた。またスリランカの方は親戚との距離がとても近く、外で遊んで家に帰ったらいとこが遊びに来ていることが当たり前で、それがとても新鮮だった。初対面のわたしにも優しく、「写真を撮ろう」とか「一緒に遊ぼう」など仲間に入れてくれたのがうれしかった。現地の方の生の生活を楽しむことができていい経験となった。

紅茶の手作り体験では、葉の状態から茶葉として飲める状態になるまでたくさんの工程を踏んでいくことを学んだ。ティーバックになった状態の紅茶しか見たことがなかったので、この体験はいい経験だった。乾燥させた葉をつぶす工程は体力が必要で、すぐ豆ができてしまうわたしと違って、難なくこなしている現地の女性はすごいなと思った。またわたしたちが昼ご飯を食べているときも、サマンテさんたちは作業を進めていてくれて自分の知らないところでたくさんの方が努力をしてくれていることに感謝しなければならないと思った。

歴史学科に所属し、授業で文化財や文化遺産を学んでいるわたしにとって、スリランカの世界遺産を見学できたのもいい経験だった。仏歯寺で裸足になって参拝したこと、蓮の花をお供えすることなど、日本とはまたちがった仏教文化をもっていて、新鮮な気持ちだった。大学の授業では日本の文化財が中心であり、また世界に目を向けようとしても本やインターネットが中心となってしまう。そんな中、仏歯寺やシーギリヤロックに行き、日本とのちがいやスリランカの歴史を実際に自分の目で見て、学べたことはこれからの自分の勉強に活かせると思った。そしてさらにいろいろな国の文化遺産を学び、知識を深めようと思った。このスタディツアーで経験したこと、目で見て感じたことを忘れないようにしていきたい。スリランカという国のことを知らない人はたくさんいると思う。実際、このツアーに参加したいことを親に伝えたとき、父親は危ないところだから心配していた。もちろん日本のように過ごすことは難しい場所であると思ったが、治安がすごく悪いところではなかった。このように、間違ったイメージを持っている人は少なくないと思う。今は SNS で簡単に自分の思ったこと、経験したことを発信することができる時代だ。そういったものを用いて、スリランカのいいところを周りの人に伝え、広めていこうと思う。いいところをたくさん見て触れた反面、悪いところ、問題があるところも学んだ。外の世界を見ると、自分の国はどうなっているのか考える。わたしは日本の貧困の現状について知っていることがあまりない。外に目を向け、支援したり積極的に学んだりすることはとても大事なことであると思う。しかし、自分の周りはどうなのか、日本はどういう状況なのか学ぶことはもっと大事なことだと思う。スリランカに行き、わたしは日本についてもっと勉強していかなければならないと感じた。スリランカに行く前は、そういうことを考えたこともなかったので、日本の現状を見つめなおすいい機会であった。今回このツアーは、友達がだれもいないところから始まった。人見知りだったわたしにとって思い切った決断であった。うまくやっていけるか不安だったが、9日間で一緒に行った5人と仲良くなれて、とても楽しい時間を過ごすことができた。このツアーに参加したことで、自分の殻が一枚はがれたような気持ちになり、もっと様々な活動に積極的に参加し、自分の価値観を広げていこうと思った。

白井夢乃

はじめスリランカと聞いたとき、世界史でしか聞いたことがなく、どこにあって何があるのか、正直全く見当がつきませんでした。私の周りにも、旅行でスリランカを訪れたことがある人は一人もおらず、あまり観光地化されていない国という印象でした。そこが逆に行ってみたくて興味をそそられた理由でもあります。興味が湧いたら即行動と思いましたが、行ってみないとわからないことがやはり沢山あり、自分のためになったツアーでした。

スリランカに一週間ほど滞在して、主にホームステイやお茶摘み、紅茶作りをさせていただきました。コロンボは日差しが強く暑かったのですが、そこまでむしむししている感じではなく、寧ろ風が通っていて日本の夏よりは快適に感じました。紅茶作りのために山の上の地域ハプタレーまで行くと、霧に包まれ洗濯物が乾きにくい以外はとても過ごしやすい気候でした。

スリランカの方たちは毎日ティーを飲みます。私がホームステイ先に着いて、まず聞かれたのが、「お茶飲む？」でした。初めて飲んだスリランカの紅茶は、ミルクティーでとても甘くて美味しかったです。スリランカでは、紅茶に入れる砂糖の量がおもてなしの度合いになっているらしく、私も歓迎をしみじみと感じながら甘い甘い紅茶を飲み干したのを覚えています。歓迎といえば、向こうの人達は私たち旅行者に気づくと大体笑ってくれるか、挨拶してくれるか、手を振ってくれる人がほとんどで、とてもフレンドリーな人柄の良い国だと感じました。表情豊かで無垢で、優しい方がたくさんいらっしゃいました。日本に帰ってもそんな印象が根強く残っていて、もっと世界中の人たちにスリランカのこういった素敵な所を知って貰いたいと強く思いました。

スリランカの紅茶は日本にも沢山輸出されていて、日本人がお世話になっている紅茶はより標高が高いところで採れるものが多いのだそうです。現地の人たちの飲む紅茶は、日本や他国に輸出されている、所謂最高級の茶葉を使用していないと聞きました。どうということかと言うと、スリランカの人たちは「ダスト」という紅茶作りの過程で一番最後に出る「残った粉」を紅茶に使っています。ダストも飲み物としてはおいしく飲めるのですが、それでも現地で作っている紅茶の茶葉は世界に認められているものなのに作り手のスリランカ人自身があまり飲まないということに驚きでした。

私達はお茶っ葉を積むところから茶葉を作り試飲するところまでの紅茶作りを一通り体験しました。茶葉を作る段階では、現地のメディアが取材に来ていて、これは一大行事なのだと悟りました。手作りで紅茶を作るということが革命的だったなんて思ってもみませんでした。

スリランカで私的にもう一つ良い体験になったのは、現地の結婚式の撮影に同行できたことです。色々な偶然が重なってとっても素敵で貴重な体験をさせて貰えました。また何かの縁があったら行きたいです。

横山七海

驚いたのは、先生たちが手裏剣の作り方を覚えようと食いついてきてくれたことだ。知りたいという欲求に忠実で、そこに年齢も立場もないことに感動した。勉強に関してもそうだ。ホームステイ先で仲の良くなった同級生のジャナニという少女は、言葉に詰まる私に何度も微笑みかけてくれ、つたない英語ながらも図や身振りで会話をする私にとことん付き合ってくれた。そのときに聞いた話によると、私たちよりはるかに英語力の高い彼女たちも、特別英会話のために教室に通ったりはしていないというのだ。七歳くらいから、十年間、ただ学校で英語の授業を受けただけだそうだ。ではその授業数が多いのか。そんなことはない。日本とほぼ同じだ。ただ、彼女たちは英語の時間には、英語しか話さず、質問や応答もすべて英語なのだそうだ。もちろんあまりに難しい質問などは、シンハラ語だそうだが。この点は本当に日本も真似をするべきだと強く感じた。

よそ者であり、知識も充分でない学生の私たちに様々なことを教え、温かく迎えてくれ、対等に会話をしてくれ、つたない英語に根気良く付き合ってくれ、時間を割いてくれたスリランカの人々に、に本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。友人、家族、師など、様々な形で人々と交流できて、本当に幸せだった。それと同時に、様々な問題がそこかしこに広がっていることも知った。学生だからできることもたくさんあるが、学生だからできないことも多い。今はまだ、直接役に立つことはできないかもしれないが、自分の見たスリランカを周りに知らせること、そして、スリランカだけではなく、日本を含めた様々な国について知っていくこと。もう一つは、自分の生活に溢れている物、たくさんの人について一つずつ見直し、改めて知っていくこと。この3つを取り急ぎ実行していきたい。最後に、このスタディーツアーに参加するにあたって支えてくれた家族や友人、仲間、先生方、大学、スリランカでサポートしてくれた方々など、たくさんの人に感謝の気持ちを忘れずにいたい。本当に幸せな経験であったと、帰国して日がたつにつれて感じている。

JIPPO 事務局 高木美智代

JIPPO9回目のスリランカ・スタディーツアーを、こうして無事終わることが出来たことに感謝しています。参加者のみなさんや、お世話になった沢山の方々の顔が浮かびます。本当にありがとうございました。

スリランカツアーは JIPPO が設立以来、毎年1、2回行ってきました。毎回何かしら新しいことを取り入れているのですが、今回の挑戦は「紅茶づくりのワークショップ」でした。「世界的な紅茶の産地なんだから、紅茶づくりなんて珍しくないでしょ」と思うかもしれませんが、実はスリランカでは、紅茶を手づくりするなんて、ほとんどの人が考えもしません。それにはスリランカの歴史や経済や民族問題が絡む、とても複雑な背景があります。

今年の2月、日本の農家がやるような手づくりイベントを持ちかけたら興味を示してくれるかなあと、遠慮気味に話しかけた私に、長年プランテーションで農園管理をしてきたニューマンさんが「手づくり紅茶の伝説があるよ」と昔話を聞かせてくれました。一緒にいた人たちは誰も知らなかったそうです。

私は心を躍らせました。私たちは翌日早速、その伝説どおり「ワンゲディ」と呼ばれる家庭にあるすり鉢を使って手づくり紅茶を再現してみました。これはいける。みんなの期待が高まりました。商品開発を進め、夏のスタディツアーでワークショップを開き、世の中にも広く知ってもらおうと計画したのです。

スタディツアーでお茶作りのワークショップを開くことは、学生さんにとってスリランカの歴史や自然や社会の様々なことを感じ考えるきっかけになるとともに、現地の人々にとっては、紅茶という自分たちの財産の価値を改めて知り、自信と可能性を持ってもらえるものだと思います。あるもの探しで地域を元気にする「地元学」という考え方がありますが、それにはよそ者の存在が欠かせません。

実際、茶摘から始まったワークショップの2日間は、とても手ごたえがありました。ホームステイもそうですが、人の説明や通訳を聞く以上に自分の五感で体験すると多くの学びがあり、記憶に残ります。共同作業からはたとえ言葉が通じなくても気持ちが通い合う実感が得られるし、そうした喜びは宝物です。そして、期待通りみなさんはスリランカの人々にも新たな気づきを与えてくれました。ニューマンさんが声を掛けたジャーナリストは最初から最後まで紅茶づくりを取材してくれ、スリランカ紅茶の新たな動きとしてニュース番組で紹介されましたが、日本人の学生が興味を示したことで人々により深く話題性を印象付けました。紅茶を手づくりするということが、経済的にも社会的にも価値がある取り組みだと認められ、農家さんたちのモチベーションは高まったようです。あの後、早速次の紅茶がJIPPOに届きました。JIPPOも新しい「フェアトレード」に取り組みたいと思います。ぜひみなさん手を貸してください。皆さんにとっても、スタディツアーが「最初の一歩」になって、アクションにつながることを期待しています。





